

お店の活気と、人のぬくもりに溢れた『百反坂』

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA（原風景）を訪ねる『大崎今昔物語』。

その第七話は、大崎駅に向かう「メインストリート」として、実に150店もの店々が軒を並べていた『百反坂』の話。

人と人、店、街のつながりがホットだった昭和の時代から、さらに明日へのつながりを見つめます。



昭和30年代の百反坂下の踏切
(現在の百反隧道辺り)

子供たちの元気な声が通りに弾んでいた、昭和30年代頃の百反坂での祭りの記念撮影



昭和30年頃の大崎駅前通り陸橋下(当時は鉄道を跨ぐ陸橋が存在)のお店(下)

昭和30年代の大崎駅西口。昭和10年代まではここから百反坂を通り戸越、荏原方面へと続く道がメインストリートでした。



※右にも多数店舗あり



昭和10年代の百反坂の店

※業種名や「店」「屋」の表現は当時の資料に準拠。店舗の位置は資料から推察したもので厳密ではありません。



百反坂は昔、曲がりくねった急な階段状の坂道でした。『百段坂』と呼ばれていたものかいつしか『百反坂』となり、その通りはかつての明電舎やソニーの辺りを眼下にした尾根道のように存在していました。百反坂下通りの入口には同鉄(JR)の線路を横切る踏切があり、ここから第二京浜の辺りまでの約1.5kmほどの通りは、東急線もまだ開通していなかったこともあり、大崎駅に通じる主要路として、戦時の空襲で街が壊れるまでまぎにありとあらゆるお店が軒を並べ、周辺に建ち始めた住宅をも商圏とした賑わいの商店街を形成していました。昭和10年頃の資料(※上参照)を見れば、ミルクホールや円タク業、竹の皮店、人力車屋、さらに松竹演芸場といった往時の日常生活が忍ばれるレトロな業種が密度濃く並んでいるのが分かります。

昭和50年頃まで百反坂にあった 銭湯『千代の湯』



昭和45年まであった百反坂下の踏切。道は写真手前の広町1丁目、第一三共方面へ続いた



駄菓子屋、銭湯、演芸場、桶屋に人力車店もぎっしりの「密実混合」商店街『百反坂』。

昭和の初期に人力車に乗ってお嫁にきました。当時この辺りは一面の畑でしたが百反坂は大崎駅の通り道として髪結いやお菓子屋、桶屋、演芸場などがぎっしり並んで賑やかでした。芳水小学校通りのお稲荷さんの縁日には、道の両側に屋台が並んで人力車も入れないほど人が沢山集まりました(故・別府せいさん談、おばあちゃん、おじいちゃんの話より)。古くから住む地元の方の話の中に、現在とは隔世の感もあるかつての活気が伝わります。

百反坂はまさに、賑わいと人のぬくもりが背中合わせに並んだ密実商店街でした。

清流(玉川用水)が道の脇を流れ、水車も回っていた、のどかで活気があった時代から。

昭和10年頃の百反坂には、店と人で賑わう通りのすぐ脇に、桐谷方面から玉川上水の清流が流れ、大正から昭和初期までは水車も回っていた、そんなのどかな光景が広がっていました。こうした原風景から新しい時代の大崎につなげていくものは無いでしょうか。何よりも150店もの店が軒を並べていた往時の活気や、通りに暮らす人々のぬくもりが、そして水と緑の潤いがいつか新しい百反坂に蘇る姿を想像し、昔日の商店街の地図を眺めてみてはいかがでしょうか。

伝統工芸の金網づくりも店閉い。通りが元気になる日を待ち望みます。

父親が西品川でやっていた金網づくりを引き継ぎ、二十歳の頃に百反坂下にてきて自分の店を開きました。伝統工芸保存会の一員として昔培った技術を残そうとやってきましたが、西口南地区(大崎ウィズシティ)の再開発も始まって、こちらが潮時だるうと店閉まいしました。寂しい気もしますが街が新しい目標に向かって生まれ変わっていくならそれもよしです。通りの脇を流れていた玉川上水の思い出とか、道の真ん中を牛が引かれていく姿とか、子供の頃の百反坂の思い出には印象深いものがあります。その頃はとにかく街が元気だった気がしていて、これからの百反坂にもその元気を期待したいですね。



現在は大崎1丁目にお住まいの 葛(つた)勇作さん(85歳)。百反坂下で伝統工芸の金網細工を営んで60年以上、大崎の街の変遷を見つめてきました。